

飼料用米を利用した離乳子豚用飼料費の削減

研究のねらい

離乳子豚用飼料には、タンパク質の供給源として嗜好性および消化性のよい脱脂粉乳等の乳成分を多く配合（約 27 %）していますが、飼料価格が高いという課題があります。

一方、大豆粕は安価なタンパク質の供給源ですが、消化率が劣るため離乳子豚用飼料への利用は限定的でした。このことから、生産性を損なうことなく飼料中の乳成分を大豆粕に置き換えることができれば、飼料費の削減につながると考えられます。

当场では、飼料用米を活用することにより、飼料中の乳成分を削減しても生産性への影響が少ないことを確認してきました。

そこで、離乳前期の子豚への玄米主体の乳成分低減飼料と慣行飼料の給与効果および飼料費を比較し、その実用性を検討しました。

技術の特徴

- 1 トウモロコシの全量を玄米で代替した乳成分低減飼料にエクストルーダ処理大豆粕の配合割合を増やし、離乳子豚に給与しました（表 1）。

表 1 飼料原料配合割合（単位：%）

試験飼料	乳成分低減	慣行
トウモロコシ	0	50
玄米	50	0
脱脂粉乳	5	25
エクストルーダ処理大豆粕	25	12
その他	20	13

- 2 玄米主体乳成分低減飼料は、慣行飼料の平均増体日量および飼料要求率に及びませんでした（図 1）。

- 3 しかし、離乳期子豚へ乳成分低減飼料を給与しても、育成・肥育期の発育に影響はなく、最終的な出荷日齢に差は見られませんでした。

- 4 飼料用米の平均流通価格を 30 円/kg、トウモロコシの輸入価格(CIF)を 21.9 円/kg とすると、飼料用米主体乳成分低減飼料は慣行飼料に比べて、1 kg 増体あたり 28 円、給与期間(子豚の体重が 8 ~ 18 kg)全体で約 280 円飼料原料費を削減できます（図 2）。

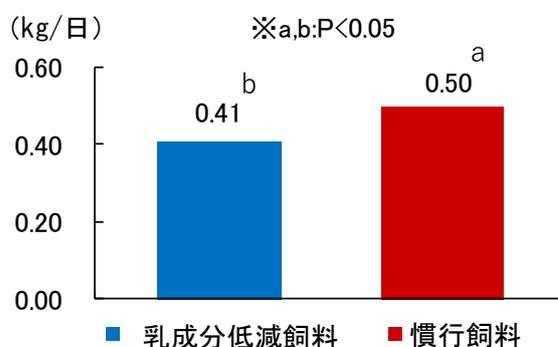


図 1 平均増体日量

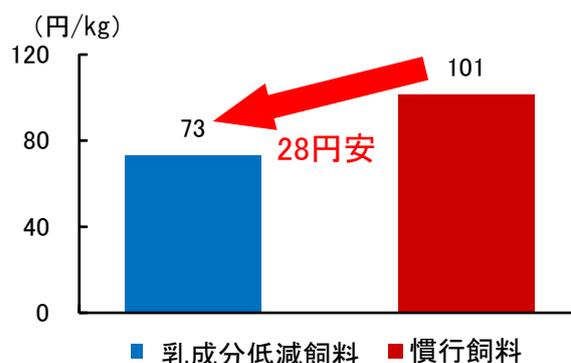


図 2 1kg増体当たり飼料原料価格

今後の取り組み

今後は、研修会等を通じて本技術を情報提供し、普及を図ります。

（執筆者：青木 圭）

連絡先：畜産試験場 養豚係（電話027-288-2222）